

秋田孝季の歴史観をたず — 「六国史」等記載の「渡嶋」について —

松山市 合田 洋一

江戸期寛政～文政年間に秋田孝季・和田長三郎吉次等編纂に係る『東日流外(内)三郡誌』や「和田家文書(『和田家資料』・『北鑑』)」等は、超古代から中・近世に亘る悠久の歴史を教えてくださいの貴重な書です。決して、「偽書」ではありません。そして、これらを編纂した秋田孝季は稀代の偉大なる学者であったことは言をまちません。ところが、上記書はいずれも編者が国内外を渡り歩き史実や伝承などを聞き取り集めたもので構成されており、いわば江戸時代の「資料集」であることから、全てを「是」とすることはできません。和田長三郎吉次が『東日流外三郡誌』古代編の序で「本書をうのみに史実の飼とすべからず」と述べている通りです。例えば、私の故郷・蝦夷地(北海道)戦国時代の歴史についても間違いが多々あるので、上記書の歴史検証はきちんとしなければなりません。因みに、超古代であっても検証できることもあります。「大筏伝承」がそれです。詳しくは拙書『地名が解き明かす古代日本—錯覚された北海道・東北』をご覧ください。しかしながら、上記書群の説話は、収集した伝承を『日本書紀』等の「国史」や外国の史書と照らし合わせて、それに依拠していると思われる秋田孝季の「歴史観」で語っていることがあります。

その一つは、古田武彦氏も述べておられる(『真実の東北王朝』)安倍・安東・秋田氏の祖で近畿に君臨していたとする「耶馬台国安日彦王・弟登美長髓彦副王」については『古事記』に出現する登美長髓彦を、また「耶馬台国」については秋田孝季が『東日流外三郡誌』「支那書物魏志倭人記之覚」に記している『三国志』より“借用”したことは明らかです。

そして、本稿首題の「渡嶋」は「六国史」等に依拠したのです。これについては、既にも上掲の拙書で「六国史記載の渡嶋は北海道ではなく、宇曾利・糠部地方である。また同書に出現する肅慎は概ねアイヌであり、肅慎国は蝦夷地・北海道である」と論述していますが、ご高覧戴いていない方のために、ここであらためて要点を述べさせて戴きます。

一、「渡嶋」と「蝦夷」 — その言葉の歴史的経緯

『東日流外(内)三郡誌』・「和田家文書」では全編「渡嶋」を北海道としています。そもそも、「渡嶋」の語は「六国史」・『扶桑略記』・「藤原保則伝」・『日本紀略』等に記されている地名です。この地名は後世「蝦夷」の読み方により左右されてきたのです。と言いますのは、「蝦夷(エミシ・エビス)」の語は本来「化外の民」の意で、初めは「九州王朝」その後「近畿王朝」の支配領域外の住民を指してきましたが、その領域が次第に東遷して平安時代中期までは東北地方の住民に対して充ててきました。ところが、その後蝦夷地(エゾチ・北海道)の住民・アイヌ民族に対し「蝦夷(エミシ)」の字を充て「蝦夷(エゾ)」としたことで、この語が混乱してしまったのです。即ち、ここで採り挙げる「六国史」等の時代は「エミシ=エゾ」の読みはなかったのです。「エゾ」という呼び名の初見は久安6年(1150)です(詳しくは拙書をご覧ください)。それなのに、東北地方の住民を混同したまま「エゾ」と呼んだり「アイヌ」としたり間違ってしまったのです。なお、「渡嶋」の語は、『日本紀略』宇多天皇寛平5年(893)の記事以降江戸時代までの間、文献上から消えてしまいます。

それでは、『東日流外三郡誌』等における「渡嶋＝北海道」としたのはいつ頃からのことでしょうか。それは、安倍貞任（前九年の役・1062年死亡、安倍氏の本拠地は岩手県）の子・高星丸が津軽の安東浦に逃れて十三湊を本拠地とした安倍氏改め安東氏の「安東水軍」活躍の平安後期以降であり、「蝦夷管領・日ノ本将軍」と讃えられた鎌倉時代のことと考えます（この頃は青森県東部の「渡嶋」と言われた宇曾利・糠部地方も安東氏の支配下）。そして「渡嶋」の語は『日本書紀』などに依拠したことは間違いありません。なお、『東日流外三郡誌』記載の角陽国（アラスカ）・神威茶塚国（カムチャッカ半島）・流鬼国（樺太・サハリン）なども、その頃の海外交易により認識したものであり、決して古代から知り得た地名ではなかった、と。

ところで、アイヌ民族の人類学上の位置付けは、近年の「DNA」研究成果により一段と進んできておりますが、まだ始まったばかりで確定には至っておりません。中でも北海道の礼文島（船泊遺跡）の縄文人骨（3500～3800年前）のDNA分析結果は素晴らしいものがあります。この縄文人とアイヌ人のDNAは70%同じということですが、人類学上のアイヌ人の系図は、縄文人の直系とは考えられず、また数千年に亘り縄文人から進化し続けた民族とも考えることはできません。その理由は長くなりますので省略しますが、両族は北方民族から派生した並列の種族であり、その後発の種族が北海道に入って土着の縄文人を駆逐または混血して、本土人に認識されるアイヌ人になったと考えております。私は今までの研究でアイヌは擦文時代の始まりの7世紀頃に北海道の歴史に登場し、それを「六国史」等を編纂した大和の史家達が情報を誤り、蝦夷地（北海道）や青森県の夏泊半島・下北半島に現れたアイヌを中国古代の沿海州民族の「肅慎」として誤認・記述したと考えます。

それでは「渡嶋」が北海道ではない理由を次に示しますが、紙面の関係でポイントのみを記しますので、詳しくは拙書をご覧ください。

(1) 「六国史」等の「蝦夷」には「エゾ」の読みはない

平安時代中期までの東北地方の民は「エミシ・エビス」であり、「エゾ」ではないので、「六国史」等当時の「蝦夷」は全て「エミシ・エビス」と訓じなければなりません。だとすれば、「渡嶋蝦夷」の読みは「わたりしまのエミシ・エビス」であり、「エゾ」であるはずはなく、従って「渡嶋」の比定地をアイヌ民族居住地、つまり「エゾ地」である北海道に求めることは間違いなのです。

(2) 「六国史」等の「渡嶋」はアイヌ社会から読み解けるか

『日本三代実録』巻35、陽成天皇元慶3年（879）正月11日。「渡嶋夷首百三人。率種類三千人。詣秋田城」（渡嶋の酋長103人が配下の3000人を率いて秋田城までやって来た）。

この記事を通説の北海道の「エゾ（アイヌ）」とするのであれば、一人の酋長が平均30人（成人男子のみ）を率いて秋田城まで来たということになり、アイヌ社会には全く充てはまりません。そして、当記事の季節は正月11日とあります。現代に於いても、津軽海峡の冬場は季節風や潮流の関係で、手漕ぎ舟で海峡を横断することは難しいとされています。この風・潮流について、江戸時代津軽海峡を渡海するための教科書とされている『北海隨筆』でも、「津軽海峡を渡海するのに夏場でも難儀する」と記されています。従って、冬のシケ

の多い期間に丸木舟（アイヌには大きな船は無かった）では到底無理です。

(3) 大いなる不思議「貢馬千疋」

『扶桑略記』養老2年(718)に「出羽並渡嶋蝦夷八十七人来。貢馬千疋。即授位禄」(出羽と渡嶋のエミシ87人が馬千頭を貢納したので位禄を授けた)とありますが、これが問題です。

『新北海道史』では「アイヌの家畜は犬以外知らない」としており、当時の北海道には馬の存在は確認できません。文献上確認できるのは、江戸時代の元和年間(1615~23)に、ヤソ会師イタリア人ジェロニモ・デ・アンジェリスとポルトガル人ディオゴ・カルワールユのそれぞれ2度にわたる蝦夷島探検報告(『北方探検記』所収)です。従って、「渡嶋」は出羽と同じく馬がいる地域でなければなりません。

(4) 当時北海道が島であるとの認識があったか

イ) 大陸に連なる

『諏訪大明神絵詞』(延文元年<1356>)に、「蝦夷ケ千島ト云ヘルハ我国ノ東北ニ當テ大海ノ中央ニアリ。(中略)其地外国ニ連テ形體夜叉ノ如ク変化無窮ナリ」その地外国に連なりとあり、大陸の一部であるとの認識を示しているように思っています。

元龜2年(1571)ガスパル・ビレラの手紙では(『北方渡来』所収)、「日本国の外に二国ある。一をエズと称し(中略)その土地は広大でノバ・イスパニアに達す」その地はアメリカ大陸に連なっている、と言っています。慶長14年(1609)スペイン人ベラスコは「蝦夷は島であるか大陸であるかわからない」(『北方渡来』)と。更に元和年間(1615~1623)ジェロニモ・デ・アンジェリスとディオゴ・カルワールユの蝦夷地探検報告では、共に蝦夷地は沿海州の一部であるという報告をしています(『北方探検記』)。2人は実際に松前(蝦夷地、松前藩城下町)に来て、北蝦夷地のアイヌや松前人から聞き取り調査したものだけに貴重な報告です。

ロ) 島の初見

一方、島として示された文献に、『海東諸国紀』があり、この中の「日本本国之図」に「夷島」として北海道が描かれています。これについて、秋岡武次郎氏は『日本地図史』で、「夷島(北海道)が別島として記載されたのはこの地図が最初である」と述べています。このように、室町時代初期から江戸時代初期に至るまでは、蝦夷地即ち北海道が、大陸の一部であるとの認識もあれば、正確に島であるとの認識もあったようです。しかし、江戸時代初期においても、このような認識の度合いであったことから類推すれば、古代においては如何に。おそらく北海道を大陸の一部だと思い、そこに住む人々が和人(日本人)と全く異なった風貌をしていたら、“さてはこれは中国の文献に出てくる辺境の蛮人・肅慎(この頃中国では、靺鞨と呼んでいた)であろう”と思ったことは想像に難くありません。つまり、この当時北海道に対して、アイランド(島)としての認識はなかったと考えます。

ハ)「渡嶋」の語源

ところで、渡嶋の「島」の概念は、本来の島(アイランド)と考えなくとも、交通の不便な地、船でなければ行きにくい地を島と考えたことは、現在でも「陸の孤島」と言っていることと同じです。また、自分の縄張り、ヤクザの「シマ」も同じこと。そして、信州の

妻籠では平地を「島」という所もあるようです。ここで「渡嶋」の語源について、古田武彦氏から貴重なご教示を戴きましたので、それを以下に示します。

島に渡るから「渡嶋」であるならば、日本中渡り島だらけになる。「渡」の本来の意味は違うのではないか。「渡（ワタリ）」の意は“祀りを行う大いなる拠点”であり、「嶋（島）」の意は“人が生き死にする場所”を「シマ」と言った。

以上の見解をふまえ、「渡嶋」という地名は、「六国史」等の史書に出現する以外、管見の限り見当たらず「島に渡る」の意味合いの地名遺称は全国どこにも無く、正に古田氏ご指摘の通りでした。ところで、『古事記』『日本書紀』の「国生み神話」は、「大八洲」について『古事記』は「島」、『日本書紀』は「洲」と書かれていました。古田氏は、

「洲」は「クニ」と読み「一地域・一地点を現す」。これは「島生み神話」ではなく、「国生み神話」である。そして、島の語源・用法から考えると『古事記』の「島」は、『日本書紀』の「洲」と全く同じ意味、同じ用法であり、「一地域・一地点を現している」と。

二、「渡嶋」の比定地

(1)「渡」地名の検索

『角川日本地名大辞典』の「小字一覧」に膨大な量の全国の「小字」（「大字」も含む）が収録されており（但し、北海道・新潟県・愛知県・奈良県・大阪府・兵庫県・福岡県は収録されていない）、その全ての「渡」地名を検索しました。北海道については同書を全て調べ「渡」地名の有無を検索しましたが、北斗市（道南地方）に江戸時代命名の1ヶ所があるだけでした。また、『新撰陸奥国誌』にも「小字」地名が収録されていることから、これも「角川」とダブらない全ての「渡」地名を検索しました。その結果、全国中青森県の東部の宇曾利・糠部地方（八甲田山系より東部、太平洋側）が109ヶ所、全国指数9、08%で全国一多く、青森県西部の日本海側津軽地方は14ヶ所しかありませんでした。これでお解りの通り、「渡」地名の発祥地は宇曾利・糠部地方だったのです。

(2) 宇曾利（下北半島）・糠部地方は「渡文明」の地

古田氏が述べておられる「渡の語源」の「祀りを行う大いなる地」は、下北半島にある「恐山」であり、地獄と天国の地は「恐山」・「仏ヶ浦」であると私は論じております。

(3)「津軽」と「宇曾利・糠部」の対立の構図

『東日流外三郡誌』によると、太古大陸からツングース系民族の「阿蘇辺族」が津軽地方に、遅れて同じツングース系民族の「津保化族」がアラスカから「大筏」に乗り宇曾利・糠部地方にやって来たと記しております。これにより、両民族の対立が始まります。中世には津軽を地盤とする安東氏及びその後裔秋田氏と宇曾利・糠部を地盤とする南部氏の抗争、近世では津軽氏と南部氏の対立が著名です。

(4)『日本書紀』『斉明紀』の「幣路弁嶋」・「大河」の考察

従来、「渡嶋」が北海道に比定されてきたことから、そこに住む民族について「エミシ」「エゾ」の混同に加え、更に「肅慎」まで加わって混乱を極め、「斉明紀」6年に1回だけ出現する「幣路弁嶋」がどこかについて、歴史家諸氏は今まで誰一人として明確にしえな

かったのです。実は、この「幣賂弁嶋」を特定することにより「渡嶋」論争に大きな帰結をもたらします。それは、「幣賂弁嶋」に立て籠って反逆した「肅慎」を、安倍比羅夫が征伐したということで、通説は「安倍比羅夫肅慎征伐」として、「渡嶋」即ち北海道を越えて、肅慎本来の地である沿海州まで出かけたということになっていました。そして、「大河」は黒龍江である、と。そこで、「渡嶋」の中にある「幣賂弁嶋」なので、「渡嶋」が北海道でないのであれば、その島は宇曾利・糠部地方になければなりません。そして、水が出て人が大勢住める島であること。そこは、夏泊半島の「大島」(陸奥湾) だったのです。この島の対岸の丘にアイヌの「コタン」の遺跡が2か所あり、島の情景は「斉明紀」6年の記事に最も相応しいのです。そして、「大河」は津軽の「岩木川」のことでした。「渡嶋のエミシ・エビス」は、九州王朝その後の近畿王朝からも恐れられ、寛平5年(893)まで「化外の民」として、時の政権に反抗してきた宇曾利・糠部の住民、つまり北辺の和人だったのです。

三、誤認の「肅慎」(「斉明紀」「持統紀」とは「アイヌ」のことだった

『日本書紀』の「肅慎」記事は、欽明天皇5年(544)12月、斉明天皇4年(658)11月・同5年(659)3月・同6年(660)3月・同6年5月、天武天皇5年(677)11月、持統天皇10年(696)3月の7回出現しています。このうち欽明天皇5年の「佐渡嶋」における記事、「渴忽て其の水を飲んで、死ぬる者半に且す。骨、巖岫に積みたり」とあり、その数の多かったことが窺われます。また、佐渡嶋に「一船舶に乗りて淹留る」とありますが、アイヌには大型船は無く、また航海に長けた海洋民族ではないので、渡島(おしま)半島から津軽の十三湊まで来るのとはわけが違い、佐渡嶋までの航海はとても無理と思われる。そして、この記事は「肅慎」の初見であり、阿倍比羅夫肅慎征伐の114年前のことです。これは、アイヌではなく沿海州に住むツングース系民族の一派が直接やって来た、つまり本来の肅慎であった可能性があります。また、天武天皇5年の記事、「新羅、沙漚金清平を遣して政を請さしむ。(中略)清平等を筑紫に送る。是の月に、肅慎七人、清平等に従ひて至り」この記事は新羅の使節に伴われて来た肅慎であり、北海道・青森地方に出現する肅慎とは明らかに違います。これも本来の沿海州に住む肅慎の可能性もありますが、沿海州の肅慎と言われた種族は、のち挾婁と呼ばれた時代を経て、この当時は靺鞨と呼ばれており、年代的な整合性から見て疑わしいことから、種族については今のところ不明としておきます。この他「肅慎」は5回出現していますが『日本書紀』の「肅慎」記事のうち、阿倍比羅夫の肅慎関係は4回あり、記事内容から見て重出が疑われる記事が2回あるので、その遠征は実質2回であると思っています。遠征先は、津軽と糠部の夏泊半島それに北海道の道南地方(「ヒグマ」の記事あり)までであったと考えます。あとの1回は持統天皇10年3月の記事、「越の度嶋の蝦夷伊奈理武志と、肅慎の志良守叡草とに錦袍袴・緋紺繩・斧等を賜ふ」とあり、これは「越国」に属する「渡嶋」の蝦夷(エミシ)伊奈理武志と同じ地域に住んで居た肅慎(アイヌ)の志良守叡草に報奨を賜う」となります。従って、その舞台は宇曾利・糠部の「渡嶋」です。以上簡略に述べましたが、『日本書紀』の「斉明紀」「持統紀」に出現する「肅慎」は「アイヌ」のことであり、「肅慎国」は「蝦夷地(北海道)」のことでした。